

横浜居留地のホテル史(2)

(1859-1899)

澤 護

1871 年

この年の1月5日、「コマーシャル・ホテル」は火災のため消失し、また「グランド・ホテル」も経営を止めたため、前年に較べるとホテルの数は減少した。また新規開業のホテルは一軒もなかったが、「ゴールデン・ルール・ホテル」という新しいホテル名が登場した。これは「ニューヨーク・ホテル」を単に改称しただけにすぎなかったが、居留地70番に関してもう一度触れることにする。

ゴールデン・ルール・ホテル

居留地70番は長い間「横浜ホテル」のあった場所だが、1866年11月の火災で焼失したあと、ここには競売業、旅行用品店、レストラン、雑貨店など多くの商店が次々と店を開いていったところであった。

この70番Aに「パシフィック・ホテル」が1870年に開業され、すぐにこれが「ニューヨーク・ホテル」と名称を代え、1871年になって「ゴールデン・ルール・ホテル」へとさらに名称が変更された。

「ゴールデン・ルール・ホテル」(Golden Rule Hotel)になった時の経営者はストランドバーク夫人だったが、彼女は1871年(明治4)5月13日に神戸より横浜へ転出してきたので、この頃にホテルがオープンされたとみなされる。翌年になるともう、彼女は37番の「横浜ホテル」の経営に乗り替わるようになったため、「ゴールデン・ルール・ホテル」は1871年春

から 1872 年にかけてのわずか 1 年たらずの存在期間でしかなかった。

1871 年 10 月 21 日、この冬のシーズンを迎えて最初の火災が居留地で発生した。現場は居留地 70 番のブリキ職・ワトキンス (J. R. Watkins) の家屋であった。消防隊が到着する前に火勢は強まり、隣接する 71 番の船大工・ムーア (L. P. Moore) の家にも飛び火していた。この一帯は小さなバーや安宿などが密集していたところであったから、一時は悲惨な結果になるのではと予測されたが、消防隊による迅速な消火活動、駆けつけた大勢の人たちが上手く手分けをして、ムーアのところに山積みしてあった大量の木材を安全な場所に運搬するという組織力をみせたことで、火災は先の二軒だけで鎮火し、奇跡的に他への延焼を免れた。横浜居留地の火災では、これほど住民が協力して大火災になるのを未然に防いだことはなかっただけに、最小の損害で消し止めたことに誰もが満足したのであった。この時、「ゴールデン・ルール・ホテル」がこの地番にあったが、幸い水をかぶっただけですんだ。

なお、記録によっては「ゴールデン・ゲート・ホテル」と記述されてもいるが、「ゴールデン・ルール・ホテル」が正しい。多分、これは 1862 年に開店した「ゴールデン・ゲート・レストラン」と混同したのであろう。

1877 年 (明治 10) 10 月に戸塚に「ゴールデン・ルール・ホテル」が開かれたが、これは横浜より小田原・箱根に遠出する人たちのための休憩所兼レストランで、飲物 15 銭、ビール 20 銭、昼食を 50 銭で提供していたが、ホテルというより期間を限って開いた休憩所といったもので、70 番のホテルとは無関係であった。

1871 年に横浜にあったホテル

「オテル・デ・コロニー」(Hotel des Colonies 164 番)

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128 番)

[[「ノース・ジャーマン・ホテル」(North German Hotel)]]

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 44 番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 37 番)

「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40 番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 31 番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18 番)

「マリーン・ホテル」(Marine Hotel 41 番)

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20 番)

「ゴールデン・ルール・ホテル」(Golden Rule Hotel 70 番)

1872 年

1872 年 3 月 21 日に、居留地 164 番にあった「オテル・デ・コロニー」を 55 番に移転すると持ち主のボナは発表した⁷⁸⁾が、その形跡のないことはすでに述べた。それに代って、ボナは 84 番に「オリエンタル・ホテル」をオープンしたが、これが「ボナ・ホテル」と居留地に住む人たちには呼ばれることがあった。この年度の新しいホテルはこれ一軒のみで、居留地のホテル数は 8 軒である。

オリエンタル・ホテル

1872 年秋に、ジャクモ商会 (John Jaquemot & Co.) の責任者・ジャクモの住宅であった居留地 84 番に、フランス人・ボナが「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel) を開業した。ボナは 1871 年から 1872 年にかけて、18 番の「インターナショナル・ホテル」の共同経営者であったが、ここを去って「オリエンタル・ホテル」の経営に専念することになったのであった。⁷⁹⁾

「オリエンタル・ホテル」の様子を伝えるものはなにもないが、開業当初この 84 番には 6 軒ほどの住宅や事務所があった一角であったから、少なくとも初めから大きなホテルであったとは思えない。

「オリエンタル・ホテル」は1878年6月まで続いたが、ボナは「グランド・ホテル」の共同経営者となるジーカーノ（**Pierre Zicano**）と共にこのホテルの買収に成功したことで、「オリエンタル・ホテル」をやはりフランス人のペイル兄弟会社（**Peyre Frères & Co.**）に譲渡すると、「グランド・ホテル」の経営に専念することになった。このため、「オリエンタル・ホテル」は「オテル・ペイル・フレール」と名称を替えて、1年後の1879年6月にオープンされることになった。

1875年1月3日、居留地80番で火災が発生したが幸い大事に至らずに過んだ。この日は丁度「オリエンタル・ホテル」である集まりの新年会が開かれることになっていたが、ホテルに向かっていたなん人かの人たちが火災現場を通りかかり、消火に協力したのであった。ひとたび燃え広がると、84番のホテルも危険な状態だっただけに、無事鎮火したことを知ったボナは上機嫌で、彼が1ヵ月ほど前にフランスより持ち帰ったばかりの上等のワインを会合の出席者に振る舞ったのだった。なお、「オリエンタル・ホテル」は居留民の間では「ボナ・ホテル」と親しみを込めて呼ばれることの方が多く、この時期の新聞記事には「ボナ・ホテル」の文字もみられたりする。

1875年9月にマルセイユを発ち、東洋への旅に向ったデュランーファルデル夫人は1881年に『マルセイユから上海・江戸へ』（“**De Marseille à Shanghai et Yedo**”）を刊行したが、上海、長崎、神戸などを見物しながら、1876年3月に横浜に上陸すると、この84番のホテルに宿をとった。

「私たちは今、とてもきちんと行き届いたホテルで、すっかりくつろいでいます。このホテルの主人はボナ氏というフランス人ですので、そのため私は満足していることを認めないわけにはまいりません。⁸⁰⁾」

同じフランス人ということで、すっかり気を楽しにした夫人だが、ボナの経営する「オリエンタル・ホテル」は、「グランド・ホテル」や、「インターナショナル・ホテル」といった大きなホテルとは違って、落ち着いた家族

的雰囲気のホテルだったようである。だからこそ、次に紹介するバードの紀行にあるように、イギリス領事館員が彼女にこのホテルを推薦したわけである。

ボナが「グランド・ホテル」の経営に乗りだす直前に、「オリエンタル・ホテル」に宿をとったひとりのイギリス女性がいた。イザベラ・バード (Isabella Bird) は、1878年5月21日にサン・フランシスコより P.M.S.S. の「シティー・オブ・トーキョー」号 (City of Tokio) で来日し、同年12月19日に「ヴォルガ」号 (Volga) に乗船して香港に向かうまでの約7ヵ月日本に滞在したが、その間の数ヵ月彼女は単身で東北・北海道を踏査した。幕末以来、蝦夷 (北海道) を旅した外国人は数多くいるが、彼女のように女ひとりで日高国・門別や佐瑠太、室蘭から長万部に至る札文峠越えをした人は他に少なく、その旅程には驚嘆の他はない。特に、札文峠は一年に数人の役人か脚夫が通るか通らないかの最大の交通の難所であったから、バードがこの峠越えに4日間も費やしたのもうなずける。

バードは横浜に上陸するとすぐその足で領事館に向かい、そこで勧められてガス灯と外国商店が立ち並ぶ本町通りを過ぎて、静かなホテルにやってきた。このホテルが84番の「オリエンタル・ホテル」であった。サン・フランシスコから同船した旅行者がみな海岸通りの大きなホテルに宿泊したのに、彼女がこの小さなホテルを選んだのは、同じ船の乗客たちのおしゃべりから逃がれるためだったと、後に彼女の紀行『日本に於ける未踏地』 (“Unbeaten Tracks in Japan”) で書いている。

バードは東京の英国公使館や横浜山手居留地245番のヘップバーン (ヘボン) 夫妻の家に宿泊したりしたので、彼女が「オリエンタル・ホテル」に泊ったのは5月21日と翌22日の2日だけであった。このホテルについての印象はなんら語っていないが、持ち主はフランス人で、一切を中国人に任せてあること、給仕頭の日本人は実に態度が丁寧であることを触れているにすぎない。ホテルの主・ボナが「グランド・ホテル」の獲得にやっき

となっていた時だったから、経営の方は中国人に任せているとなったものであろう。

1872年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 44番)

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128番)

「ノース・ジャーマン・ホテル」(North German Hotel))

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 37番)

「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 31番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

「マリーン・ホテル」(Marine Hotel 41番)

「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 84番)

1873年

前年に「セントラル・ホテル」が閉業したが、代って「グランド・ホテル」が新規開業した。これは1870年にオープンした「グランド・ホテル」を取り壊わして新築されたものである。この年度のホテル数は八軒だが、当時としては一応格のあるホテルが生き残っていたといえそうである。

新しいグランド・ホテル

1870年に居留地20番に「グランド・ホテル」があったことは、既に当該個所で触れた通りである。古い三階建てのホテルを取り壊わし、1872年中に新築が始められた「グランド・ホテル」の新規開業は、1873年(明治6)9月10日のことであったといわれている。この日の「横浜毎日新聞」(834号)の広告では、次のように掲載されているが、若干の問題がないでもない。

「廣告

今般拙者儀當港二十番に於て旅館を開き諸事欧州之例に倣ひ家具美麗を盡し萬器清潔を極め専ら諸客の便利に注意し欧米諸国之旅館と毫も異なるなし且食事ハ常食非常食の兩種に分ち精々入念調理仕候尤非常食ハ四人より百人に至るまで御誂ひ次第急速出来仕候且館内ハ御好に隨ひ入御覽候間貴賤貧富に拘らず賑々敷御光来奉希候。

海岸二十番

グランドホテル主人」

ところで、日本に於けるホテル業を調べようとすれば、まず最初に目を通すのが運輸省の編纂した『日本ホテル略史』(昭和21年刊) だろうが、同書の「グランド・ホテル」の個所をみると次のように記載されている。

「明治六年九月、横浜海岸通り二〇番にフランス人ボンナ (**Bon Nat**)、料理長ムラオー (**L. Muraour**) をパートナーとしてグランド・ホテル開業す。建物は木造二階建、一階に食堂、読書室、料理場があり、二階に客室三〇室を有す。」

これを受けて、実に多くの既刊書が「グランド・ホテル」の開業時の持ち主を「ボン・ナ」と「ムラオー」として紹介してきたが、実際には全く違っていた。簡単にこの記述の誤りを指摘すると、フランス人・ボナ (**L. Bonnat**) が「グランド・ホテル」を経営するようになるのは1878年(明治11)以降のことで、ボナはこの頃にあつては居留地84番の「オリエンタル・ホテル」の経営者であった。

ミュラール (**Léon Muraour**) が「グランド・ホテル」と関わるのは、明治10年と明治20年の一時期で、むしろ彼の弟・ポーラン・ミュラール (**Paulin Muraour**) との方が深い付き合いで、ボナが経営権を握った時の料理長は弟のポーランの方であった。兄レオンは明治7年3月に伊豆沖で起きた「ニール」号 (**Nil**) 遭難事件の際に、乗客・乗組員合せて90名中

の生存者四名の内のひとりであり、明治6年9月の「グランド・ホテル」の開業時には横浜に滞在していない。⁸¹⁾また建物の「木造二階建」も、「石造二階建」とした方が正鵠を得ているといったように、記述はほとんど訂正しなければならない。残念なことだが、この『日本ホテル略史』の記述はあちこちに誤謬がみられるだけに、これを参考として利用する人は大いに心しなければならないであろう。

「グランド・ホテル」の新規開店は、1873年9月10日であったと先に書き、「横浜毎日新聞」の広告を示したが、実際にはもっと早くオープンされていたのである。「グランド・ホテル」は横浜を代表する、というより日本最大の有名なホテルとなっていくだけに、これについての記述は非常に多くあり、そのいずれもが明治6年9月の開業としているが、現実には9月10日より25日も早く新規開業はなされていたのである。

居留地五番の「横浜ユナイテッド・クラブ」で詳述するW. H. スミス、長い間横浜に居留していた写真家のベ아트 (Felix Beato) ら数人の資本家が資金をだしあって建築した新しい「グランド・ホテル」の新規開業は1873年8月16日の土曜日で、この夜は盛大な祝賀会が催され、大勢の招待客はさまざまな近代的設備に驚嘆し、美味しい豪華な料理に舌鼓を打ってはホテルの開業を祝い、その前途は成功疑いなしとスピーチしたのであった。⁸²⁾

新しい経営陣は、W. H. スミスをマネージング・ディレクターとして全権限を彼に与え、リオンズ (John Lyons) を支配人とし、東京の「ホテル・デ・コロニー」にいたベギューをコック長としてでのオープンであった。

開店当初の料金は、月極め二食付きで60ドルであったから、かなり高い宿泊料金だったわけである。参考まで書き加えると、箱根の「富士屋ホテル」が外人客用の施設を設け、彼らを宿泊させるようになった時の料金が一泊50セント、月極め食事付きで35ドルであった。

「グランド・ホテル」は一般旅行者も宿泊できたのはもちろんだが、長期の滞在者も大勢いた。例えば、日本政府が雇用したお雇い外国人などは、日本が招いた大切な人たちであったから、適当な家を彼らに提供するまでは、このホテルに宿泊させることがよくあった。

駅通寮に雇われ、明治8年の外国郵便創業に尽したブライアン (Samuel Bryan) は1874年10月に妻と子供を連れて再来日したが、彼らもまた「グランド・ホテル」の長期滞在者であった。

1875年(明治8)に入ると、経営陣に若干の変化が生じた。この年の4月に、かつてロンドンの「ランハム・ホテル」(Lanham Hotel)で腕をふるったボエル (Chas. Boël) がリヨンズに代って支配人となり、料理長のベギューは東京・竹川町12番地(後に14番へ移転)で「インターナショナル・レストラン」を開店するため「グランド・ホテル」を去った。ベギューの後に料理長として登場するのがポーラン・ミュラールで、彼はこの7月1日よりその任についた。この年の秋には新しいビリヤード室が開かれ、読書室には各国から取り寄せた新聞・雑誌が数多く閲覧できるようサービスもなされるようになっていた。

1876年に入り、支配人と料理長の顔ぶれがまたも代わり、かつてマロン商会で働いていたレイノー (J. Reynaud) が新しい支配人となり、シェフにはガンドーベールが選ばれて、フランス人による経営が続けられることになった。1877年に入ると新しい顔ぶれによる経営はかなり負債がかさみ、危険な経営状態に陥った。

この頃の「グランド・ホテル」の出資者は80名ほどがいたが、1877年暮れに大手の出資者のひとりであったベアトがホテルから手を引くといった事態がもちあがり、⁸³⁾ 債券所有者の間では大きな動揺が起こった。このため有志による挺子入れが行なわれたものの好結果にはつながらず、ホテルの全施設はバーン商会 (Bourne & Co.) によって1878年6月に公開の競売にかけられることになった。⁸⁴⁾

1878年（明治11）6月1日に開かれたオークションで、「グランド・ホテル」は22,100ドルでヘマート（J. von Hemert）の手に落札されたが、ヘマートは代理で、実はボナが入札の成功者であった。

「グランド・ホテル」の新しい持ち主となったボナは、6月10日にホテルの再開を発表したが、施設の手直しに手間どり7月1日までオープンはずれこんだ。⁸⁵⁾

この時の新しい経営陣は、ボナと彼の同僚であったジーカーノとミュラール弟の三人で、月極め宿泊料金を40ドルと割安に押さえての再開であった。すでに記述した通り、「グランド・ホテル」はまずスミスやベアトらのイギリス人の資本で明治6年に開業され、明治11年になってフランス人の手に渡ったわけで、多くの書にあるように初めからフランス人・ボナが開いたホテルではなかったのである。

ボナの経営する「グランド・ホテル」は1年ほどで終りをとげた。この頃に健康を害していたボナは、フランスでの転地療養の必要性から一時期横浜を去る決心をしたからであった。

これまでも一時フランスに帰国したことのあるボナは、その旅には必ずフランス郵船を利用したものだったが、今回は途中の東南アジアやインド洋での猛暑を避けるため、フランス郵船の就航する東洋航路での旅を断念し、アメリカを経由する旅程を選んだ。

1879年（明治12）5月16日、オクシデンタル・オリエンタル郵船の「オセアニック」号（Oceanic）に乗船したボナは横浜港を後にしたが、この時には再び横浜の土を踏むことはないとは思いだにしなかった。17日の所要日数で太平洋を渡った同船は、6月1日に無事サン・フランシスコに入港をはたした。

余談になるが、1870年代における横浜からサン・フランシスコへ向かう船舶の最短所要日数は15日で、1879年までの過去20年間に4回記録されている。その内の3回までもが、この「オセアニック」号が15日という記

録を作っているだけに、同号はなかなかの快速船だったわけである。

サン・フランシスコに到着したボナは、ここから鉄道を利用してニューヨークへと旅を続けたが、ニューヨークに着いた時には疲労が非常に烈しく、とてもパリへ向かう体力もなかったために、ここで一時滞在を余儀なくされた。静養に努めたものの、健康はついに回復することなく、7月に入って彼はこの地で逝去した。

ボナが横浜を発った後のホテルの経営は、ジカーノとミュラール弟のふたりに任せられて、ボナなき後の1880年7月には15馬力の蒸気船を建造し、船上での納涼パーティを企画したり、また横浜港一周の散策などで客の評判を呼んだ。さらに翌1881年5月には、落ち着いてゆったりくつろげる広い喫茶室を新たに設けるかわら、アメリカから「エクリプス」(日食)とか「モナルシー」(君主制)といった変った愛称を持つ高級ビリヤード台を輸入してはホテル施設の充実を図り、利用客の要望に答えたのであった。なお、この時期における「グランド・ホテル」の昼食は平均1ドル、ディナーが1ドル25セント(1円25銭)と、かなりの高額だった。

1880年(明治13)代に「グランド・ホテル」で旅の疲れを癒した旅行者の紀行文はかなりみられるが、いずれもただ単にこのホテルに宿をとったとだけ書き留めているに過ぎず、ホテルの外観、同宿の旅人、料理といった面にまで気を配って書き残した紀行はみあたらない。

1881年夏、当時としては極めて珍しい旅行コースであったシベリヤを経由して、パリから来日したエドモン・コトー(**Edmont Cotteau**)は、横浜では「グランド・ホテル」に投宿したが、彼の記述も他の書物と同じように、ホテルそのものの描写は実にそっけない。コトーはウラジオストックからまず長崎に到着し、ここでP. & O.の「マラッカ」号に乗り換えて横浜へとやって来た。

大型船舶は波止場に接岸せず沖合いに停泊し、そこから小型の汽艇やサンパンで埠頭に上陸したために、この艀の支払い方法でよく日本人の船頭

と旅行者とはもめることがあった。コトーの「グランド・ホテル」は、次のように書かれているだけである。

「(マラッカ号の) 錨が海底に着くか着かないうちに、われわれの乗った船にはグランド・ホテル所有のランチがもう横着けされていた。荷物が運び下ろされる。われわれ旅行者の数はわずかだったので(筆者注: 当時の P. & O. の郵船は 1 等と 3 等船客に別けられて 2 等はなかったようである。3 等室は欧米人が入室できる雰囲気ではなく、彼らは全て 1 等を利用した。この時の 1 等船客はコトーを含めて 5 名)、全てすぐに終わった。数分後に、税関に着いたが、ここでは非常に丁寧だが同時に極めて厳しい日本人税関吏が、われわれの荷物を入念に調べた。ホテルは目と鼻の距離で、4 時にはこの快適な建物の二階にある広い奇麗な一室で私は身を落ち着けていた。⁸⁶⁾」

1884年に刊行されたコトーの『極東における一旅行者』での「グランド・ホテル」の描写はこれで終わるが、彼が9月に訪れた箱根・宮の下の「富士屋ホテル」と「奈良屋ホテル」の叙述は実に細かい。やはり日本旅館での体験やそこで受けた接待はもの珍しく、完全に西洋式の「グランド・ホテル」とは受ける感じが全く違っていたわけである。

明治初年ヨーロッパから日本に至るコースは、スエズを経由する東回りか、アメリカ大陸を横断する西回りかしかなかったので、コトーの旅したセント・ペテルスブルグよりウラジオストックに至るシベリヤ経由の彼のもう一冊の紀行『シベリヤ経由パリから日本へ』は、たいへん興味ある旅行記となっている。

明治年間にシベリヤを経由して来日した旅行者はコトーが初めてのことでなく、明治7年にやはりフランス人のビクトール・メイニャン (Victor Meignan) が来日している。メイニャンは若い旅行者で小説家でもあった

が、彼はパリより北京まで厳冬のシベリヤ、モンゴルを越え中国に入り、そこから上海を経由して横浜にやって来た。たったひとりでこの冒険家向きのコースを踏査したメイニャンは、2週間日本に滞在して、横浜からサン・フランシスコへ向かい世界一周旅行を完遂したのであった。

1879年5月にボナが離日したあと、ボナ商会の最高責任者となったピエール・ジカーノによる「グランド・ホテル」の経営は、1881年暮れまで続いたが、この12月にボナ商会が手を引き、代ってボワイエ商会(Boyer & Co.)に経営権が委ねられた。ボワイエ商会のジョゼフ・ボワイエ(Joseph Boyer)は、ミュラール弟とコーザン(M. Causan)を共同経営者として、三者による「グランド・ホテル」が1882年1月1日より開業された。⁸⁷⁾三代目の経営者ということになる。

彼ら三人による「グランド・ホテル」だが、コーザンがすぐにボワイエ商会を去り、代ってムールロン(E. Moulron)が新たに経営に参加した。しかし、ムールロンも3年ほどで同商会を辞めたため、1884年5月よりボワイエとミュラール弟のふたりによる「グランド・ホテル」の経営が1886年まで続けられていった。

1886年に、隣接地18番と19番にあった「ウインザー・ハウス」(「インター・ナショナル・ホテル」の後身)が火災で焼けたあと「グランド・ホテル」に統合・合併されることに話がまとまり、このハウスの経営者であったウルフが一時期「グランド・ホテル」の経営者のひとりとして加わるようになった。この三人による経営は、ボワイエ商会がこのホテルから手を引く1889年(明治22)まで続いた。

1889年に「グランド・ホテル」は大きな変貌をとげた。つまり、18番と19番の「ウインザー・ハウス」の跡地に新館を増築し、その経営を会社組織で行なうというものであった。

旧館の右隣りに新館を建てる当初の計画は、その後になって海岸通りからみて旧館の裏手に当たる水町通りの地所にも増築しようという拡張案と

なって、1889年秋に工事の着工にかかった。1890年5月の観光客の多い時期を狙って新館のオープンを予定したが、工事は若干遅れをみて6月末の開業となった。

ここで、1873年8月にオープンされ、スミス、ボナ、ボワイエと続いた個人経営による「グランド・ホテル」は終焉を迎えたのであった。

ところで、この「グランド・ホテル」旧館の設計者は、アメリカ人建築家のブリジェンス (**R. P. Bridgens**) ではないかと言われている。ブリジェンスは1865年（慶応元）3月23日に約2ヵ月もかけてサン・フランシスコより横浜港に着き、1891年（明治24）6月9日に横浜で逝去するまでの間、新橋・横浜駅、横浜税関、横浜町会所など数々の設計をした人物であった。

ブリジェンスの作風は華麗さとか優雅さに欠け、どちらかといえばずんぐりとした単調な建築が多いので、この平面的で変化に乏しい「グランド・ホテル」旧館の設計も、彼の手になった可能性は大いにあり得るが、その確証はつかんでいない。彼の墓は山手外人墓地にあり、その碑によると1819年4月19日生まれ、1891年6月9日没と書かれているようにみえる。しかし、この碑はかなり風化が進んでおり、死亡月日については死亡記事がこの頃にみあたらず裏がとれない。なお、夫人の方は、1907年9月24日に77歳で逝去した。

増築後のグランド・ホテル

1889年下半年期より「グランド・ホテル」は株式組織となり、アメリカ海軍の医師であったグラバット (**Dr. Gravatt**)、ブラン (**E. Blanc**)、ウォルター (**W. B. Walter**) とマクドナルド (**M. McDonald**) の四名が代表となり、彼らによってホテルの運営がなされることになった。

1889年夏に「グランド・ホテル」の右横に新館を建てる計画が本格化し、横浜在住の建築家サルダー (**P. Sarda**)、ピヨン (**F. Pillon**)、ダイアック

(J. Diack) らに見積もりの提示を求めた。その結果、サルダーの見積もりが最適となりグランド・ホテル側は彼に設計・企画を依頼することにした。⁸⁸

企画の過程で、従来あったホテルの右横に新館を建てるばかりでなく、ホテル裏側の水町通りに面した敷地内にも増築しようとの案が提示され、最初のサルダーの設計や見積もりに手直しが生じ、このためもあって1890年5月の新館開業予定が約2ヵ月遅れた。これにより、ホテル側はサルダーに対しきちんとした設計料等の支払いをしなかったことから訴えられ、1891年11月から12月にかけて領事館裁判事件へと発展していった。

「グランド・ホテル」新館のオープンは1890年6月30日のことであったが、この時には未だ内装などは完全に出来上がっていなく、特に電気関係の配線や工事が遅れ、新館全体の照明は1891年1月に入ってやっと完成したので、工事中でのかなり付け焼き刃な開業で、春の旅行シーズンを逃がしたくなかった経営陣の焦りがみてとれる。

新築工事中にグラバットやマクドナルドは日本を離れたため、新館オープン以来しばらくの間はラウダー (John F. Lowder) とブランが「グランド・ホテル」の責任者となり、支配人にはホテル・マンとしての腕の冴をみせるエピンゲル (Louis Eppinger) を選んで、その運営に当たらせた。エピンゲルはドイツ生まれの男だったが長い間アメリカで暮らし、1890年(明治23)に来日してこのホテルの支配人となり、1908年(明治41)6月に79歳で逝去するまでその任にあった。エピンゲル時代のホテルは評判がよく、彼は次々と改修・増築しては世界に冠たる「リッツ・ホテル」や「カルトン・ホテル」並みのものにしたいとの意欲をみせていた。

例えば、日清戦争のため来日する外国人の数も増え、さらに居留地87・88番の「オリエンタル・ホテル」が1894年に焼失したあと、大手のホテルとしてはせいぜい「クラブ・ホテル」ぐらいしかなくなったため、1895年(明治28)にはさらに増築工事に着手していった。この時の「グランド・ホテル」の客室は360余であったと「万朝報」は記事にしているが、この客

室数に関しては他にきちんとした記録はない。

なお、エピンゲルが逝去する直前には、新しい250有室のベッドを有するチュードル様式の建物を新築する計画がなされていた。

「グランド・ホテル」が1890年6月に会社組織になってからは株主総会がきちんと定期的に開催されるようになり、その都度きちんとした収支報告がなされた。このため、1890年下半期以後のこのホテルの収支報告書から、ホテルの変遷やその時代の状況を知ることができる。例えば、1891年1月に開かれた最初の株主会議の席上で、経営責任者のラウダーは「会社は満足すべき状況にあり、その先行きは希望にあふれている。ホテルでもてなしを受けた利用客からの多くの手紙では対応は賞賛に値し、経営・食事は完璧、妥当な料金だとし、ホテルの運営が一般に評価されているのは喜ばしいことだ⁸⁹⁾」と述べている。

「グランド・ホテル」の宿泊者や外来者に対する服装はかなり厳しいものがあつたが、それでも、1888年（明治21）のクリスマス・パーティーにはだれかの発案によって、出席者は全員が和服着用、つまり男性は黒紋付に仙台平の袴を、女性は裾模様にシッチン緞子、それに思い思いの丸帯を結び、丸まげか島田に結い、紙入れも日本古来のものを所持と仮装パーティーまがいのこともあった。

ところが、会社組織になった後の1891年（明治24）9月に、イギリス人のアルマンが羽織袴の正装で「グランド・ホテル」の食堂に入ったところ、入室を断られたあげく、従業員に殴打されるという事件が持ち上がった。腹の虫のおさまらないアルマンとホテル側の紛議は続くことになったが、日本の土地で営業しているホテルが、仮りにも正装した和服姿の客を入れないとはなにごとかと、慶応義塾出版の刊行する「時事新報」はかんかに怒ってみせている。

横浜での賑わいの中心である「グランド・ホテル」は、何度かに分けて増築されていったため、迷路のような廊下がひっきりなしに行き交い、さ

らに同じような広間があちこちにあったため、初めてここに泊った人たちは、自分たちの部屋と正面玄関を行き来するだけでも、ボーイに案内させないことにはどこへどう行ってもいいものかわからないという有様であった。

1893年（明治26）に「グランド・ホテル」に着いたある旅行者は、部屋に入るとすぐ洋服や靴の注文取りがきたり、骨董品の行商人が顔をだすためわずらわしさを覚えながらも、入れ墨の勧誘には好奇の目を向けたりしている。旅行者は日本の記録を体に留めるため、この機会を逃がさず好んで入れ墨で体を飾ったという。

この頃の「グランド・ホテル」での一泊料金は食事付きで4円で、東京の「帝国ホテル」と共に国内料金では最高のものであった。箱根の「富士屋ホテル」、京都の「也阿彌ホテル」、神戸の「オリエンタル・ホテル」などが3円50銭であったが、箱根の湯治客向けの宿が食事込みで40銭であったからいかに高い料金であったかがわかる。

この料金もやがて8円になり、さらに1910年（明治43）代になると15円と、こゝ10数年の間に4倍に近い値上がりをみせていった。

明治40年代の「グランド・ホテル」は日本人や中国人も経営に参加するようになったが、明治20年代のこのホテルを知る旅行者はかつての行き届いた接待と伝統、さらにホテルそのものの格式や個性が失われてしまったようだと嘆いてみせている。それでも1908年（明治41）4月には新装になり、254客室の3分の2室からは湾を見渡たせ、年間20万円を下らない純益が見込めるとも報じられた。⁹⁰⁾

ホテル内で起こった自殺さわぎ、あるいはボヤさわぎなどこのホテルに関する話題にはこと欠かないところがある。このような日本最大を誇った「グランド・ホテル」も1923年9月1日に発生した大地震で一瞬にして壊滅し、その上、火災を起こしたため完全に巨大な石の廃墟と化してしまった。なお、現在海岸通りにある「ホテル・ニュー・グランド」と、このホテルとは何の関係もない。

1873年に横浜にあったホテル

「ベルリン・ホテル」(Berlin Hotel 128番)

「ノース・ジャーマン・ホテル」(North German Hotel))

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 44番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 37番)

「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40番)

「マリーン・ホテル」(Marine Hotel 41番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 84番)

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20番)

1874年

この年に新しく新規開業されたホテルは、居留地187番の「オテル・ド・リュニヴェール」と、「ホテル・デュ・ルーブル」の二軒で、いずれもフランス人による経営であった。

「オクシデンタル・ホテル」の名前が初めてでてくるが、これは「インターナショナル・ホテル」を改称しただけなので、この年度にあったホテル数は九軒である。なお、「横浜ホテル」が移転開業された。

オテル・ド・リュニヴェール

1874年6月27日、居留地187番に「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」(Hotel et Café de l'Univers)という長い名前のホテルがオープンしたが、⁹¹⁾すぐに「オテル・ド・リュニヴェール」(Hotel de l'Univers)と名称が変更された。このホテルの経営者は、アンドリー (E. Andries) とガンドーベール (G. Gandaubert) というふたりのフランス人であったが、ガンドーベールの方は神戸居留地でホテルを経営したり、「ウィンザー・ハウス」のコック長をしたりもしていたので、本稿でもよく登場する人物で

ある。

このホテルの開業当初の料金は一泊で75セント、月極め15ドル、1泊2食にワイン付きでの1ヵ月料金が40ドルから50ドルであったから、当時としてはまず標準的な金額であった。

建築費に1万4千ドルも投入して新規開業されたホテルではあったが、翌1875年に入ると経営はかなり悪化し、この5月にはホテルの全施設が競売業・フレッチャー商会の手で、公開によるオークションで処分されることが報じられた。しかし、ホテル所有者のひとりであるガンドーベールは、この6月1日より15日までホテルを一時休業して、それ以降は彼ひとりによって経営すると発表したように、^{9.2} ホテルの経営や処分に関しいろいろと混乱が生じていた。

このような状況の中で、ガンドーベールはまずホテルの一階にあったレストランとビリヤード室を1875年6月19日にオープンし、来客には金時計、イヤリング、ネクタイ・ピンなど数々の賞品が当たる福引きを目玉にして来訪客の関心と呼ぼうとした。一時的に客は集まったが、一度傾いたホテルの立て直しは容易なことではなく、半年後の12月15日にはついに閉業に追い込まれ、^{9.3} またもホテルは売りにだされた。

4台のビリヤードのあるサロン、大きな酒場、ふたつの食堂、読書室、9部屋などを含むこの木骨石造二階建てのホテルは、1876年1月20日に今度はバァーン商会によって公開の競売にかけられることになった。この頃の「オテル・ド・リュニヴェール」のあった地番は187番の他に168番との記録もあるため、両方の地番に同名のホテルがふたつあったように思われるが、実際は同じホテルであった。

1870年（明治3）に入り、居留地の地番が一部変更となり、166番から173番までの区画が185番から192番へと改められた。168番は、したがって187番ということになるので、記録によって168番という旧地番での記載もあったわけである。

1876年1月20日の公開競売の結果は、いったいどうなったのか、また誰に落札されたのか不明だが、日刊紙「ジャパン・ガゼット」をみると、1月20日付けの広告で「オテル・ド・リュニヴェール」の売り、または貸し広告が早くもアングリン（James Raymond Anglin）の名前で掲載されている。

この広告を表面的に眺めると、1876年1月20日に公開オークションにかけられたこのホテルはアングリンの手に落札され、それがその日のうちにアングリンによってまたも売りにだされたということになる。

しかし、アングリンは長い間に渡って「ジャパン・ガゼット」紙（The Japan Gazette）や「ザ・ファー・イースト」紙の発行に携わり、1876年代は同紙の経営者のひとりで、ホテル経営には一度も手をだしたことのない人物であったから、1月20日の競売は不調に終わったものと判断できる。このため、アングリンが一時的にこのホテルの所有を肩替わりして、新しい経営者か買い主が現れるのを待つあいだ新聞広告をするということで話が落ち着いたものであろう。なお、アングリンはイギリス20連隊所属、軍人として来日し、「ジャパン・ガゼット」社の社主となった人で、1891年6月8日に箱根・小涌谷で静養中にここで逝去した。49歳という若さであった。

1876年1月に公開競売にかけられ不調に終わったホテルは、この年の2月15日に再び同じバァン商会によって競売にかけられた。この折に、ヴィバット（B. Vivat）、ジロー（E. Girault）、カイヤン（Caillens）の三人がこのホテルを共同で運営しようという話し合いがなされ、まずビリヤード室と喫茶室をオープンしようとなった。

1876年3月25日に開店した時の名称は「カフェ・エ・レストラン・ド・リュニヴェール」といい、ホテルの営業の方はしばらくのあいだ見合わせることにした。4月1日にレストランの方も開店させたが、ホテルの開業まで漕ぎ着くことはできなかった。複数の人による共同経営は結局は失敗

に終わることの方が多く、彼ら三人による経営はまもなく破綻をきたした。

1877年3月、ビリヤード室、レストラン、読書室、ふたつのバー、9室の寝室よりなるこの二階建て木骨石造ホテルはまたしても売りにだされた。これを1300ドルで手に入れたのはデニオー（J. Déniaud、記録によってはJ. Denéaud）で、彼は旧名の「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」の名称でホテル経営に乗りだした。ただし、1877年10月のフランス領事館裁判記録を読むと、デニオーが貸していた家具をカイヤンが売り払い、そのためデニオーが訴えて⁹⁴いるので、一時的にせよカイヤンにホテルの運営を任せるか雇用していた様子が窺⁹⁴える。

居留地187番はフランス・カトリック教会の裏手に当たり、メイン・ストリートからもさほど遠くない本村通りに位置するだけに場所としては決して悪いところではなく、近くにはフランス・パン店やジェラルルの水工場などもあった一画だが、デニオーの経営するホテルは1879年に入ると思わしくなくなり、この年の6月には賃貸⁹⁵しする広告を発表した。この時の広告では「ル・カフェ・オテル・ド・リュニヴェール」（Le Café-Hotel de l'Univers）との名称になっているが、187番のホテルは「オテル・ド・リュニヴェール」と呼ばれるのが通例であった（この地番には後にいくつものホテルが開かれ、昭和50年代にも「オリエンタル・ホテル」があった）。

ところが、いつまでたっても借り手はつかず、この状態は1880年に入っても続いた。結局、1879年後半からは開店休業の有様で、デニオーの住いとなったこのホテルは、その機能を十分に発揮していなかった。1880年暮れに、この家屋は火災によって壊滅したが、1881年に入ると新しい経営者により、この地番にまたも同名の「オテル・ド・リュニヴェール」が再建されていった。

新しい「オテル・ド・リュニヴェール」については1881年の項で記述しておいたが、同地番に同名のホテルがあり、1880年前と1881年後のホテルの建物は全く別のものであったことに注意する必要がある。

なお、1878年（明治11）の一時期、このホテルの経営はカズアルタ（J. Casualta）にまかせられていたふしも窺えるが、この追跡はできないでいる。

オテル・デュ・ルーブル

1864年に居留地99番にあった「オテル・デ・コロニー」は、翌1865年2月に164番に移転した。この時期の経営者はラプラスであったが、彼は1869年にボナに経営権を譲ったあと一時フランスに帰国した

1871年に入ると、「オテル・デ・コロニー」の経営者・ボナは他に転居したため、164番のこのホテルは空き家となっていた。ラプラスは再び日本にやって来て、1874年にこのホテルを「オテル・デュ・ルーブル」（Hotel du Louvre）として開店した。164番時代の「オテル・デュ・ルーブル」の記録はほとんどないが、1874年4月の新聞広告で金時計の紛失が伝えられ、拾得者は上記ホテル宛に連絡されたいと記載されているだけに、1874年春にはオープンされていたことになる。

「オテル・デュ・ルーブル」は、1875年（明治8）1月28日に居留地の中心であった60－61番の新しい建物へ移転開業した。⁹⁶⁾ 1874年に61番には定期的に週2回横浜・箱根間に馬車を走らせていたコブ会社（Cobb & Co.）、大手の洋装店ドリスコール商会（Driscoll & Co.）などがあったが、1874年9月にここで火災が発生した。この火災のあと、これらの会社と61番にあったトンプソン（John Thompson）の薬店「メディカル・ホール」は、共同で60番と61番にまたがる新しい家屋を建築し、これが12月に完成した。

この新店舗に、1874年12月14日ドリスコール商会がまず店開きをしたのを皮切りに、トンプソンの「メディカル・ホール」とコブ馬車会社が入居をすませ、翌1875年1月に入って「オテル・デュ・ルーブル」が新規開業することにより、この新しい建物への入居者は全て決まった。なお、61

番の「メディカル・ホール」の看板がみえる古い写真や銅版画によって、当時のこの建物を偲ぶことができる。

「オテル・デュ・ループル」はラプラス夫妻により経営されたホテルで、60・61番の建物の二・三階部分がホテルとして使用され、読書室、食堂、ビリヤード室を有し、月極め宿泊料は2食付きで40ドルから50ドルであった。しかし、1876年9月にラプラス夫人が横浜を去ると、後に残った夫はこのホテルの経営を諦め、この11月にはこのホテル名はなくなった。したがって、「オテル・デュ・ループル」は1874年春頃に居留地164番に、1875年1月から1876年11月まで60・61番に短期間開かれたにすぎなかった。

1874年12月、日本で金星が太陽面を通過するという自然現象が観測できるとあって、フランス、アメリカ、およびメキシコからの観測隊が来日した。その内のメキシコ隊は、この11月9日に英船「バスコ・デ・ガマ」(Vasco de Gama)号で来港し、隊長のコバルビアズ (Francisco Diaz Covarrubias) は宿舎を「フランス・ホテル」にとったと、1876年に彼の書いた旅行記(“Viaje de la Comision Astronómica Mexicana al Japon”)に記している。

しかし、1874年11月に「フランス・ホテル」という名称のホテルは存在しないので、フランス人の経営していたホテルを便宜的にそう呼んだものであろう。この時期フランス人が経営したホテルとしては、居留地187番の「オテル・エ・カフェ・ド・リュニヴェール」、84番の「オリエンタル・ホテル」か61番に新築される前の164番の古い「オテル・デュ・ループル」のいずれかということになる。いずれとも限定することはできないが、参考までにここに記録しておく。なお、「オテル・デュ・ループル」は「カーティス・ホテル」として開業されるが、これは1876年の項で記載する。

横浜ホテル (居留地108番)

居留地37番の「横浜ホテル」の最後の経営者はアリス・ストランドバー

グ夫人だったが、彼女は1873年（明治6）にこのホテルを火災で失った後、翌1874年6月に108番に移転すると再び「横浜ホテル」の看板を揚げた。⁹⁷⁾

108番はかなり出入りの激しい場所で、大勢の人たちが短期間この地番に居住していたので、その家屋を特定することはできないが、おそらく1871年以降洋品店を開いていたビンセント夫人が住んでいた家がホテルとして生まれ替ったものとみなされる。1874年6月18日付けの「横浜ホテル」のオープンを知らせる広告では、改装・改繕し読書室とビリヤード台を備えたホテルとしてあるだけで、特別の記載は他にない。

居留地108番は105番の英国教会の隣りに位置し、一方は堀割りに面した地番であったので、ホテルの立地条件としてはかなり悪い地所にあったといえる。このため、ストランドバーグ夫人は1年たらずでこのホテルの経営をあきらめると、横浜を去った。ストランドバーグ夫人が手懸けたホテルとしては、70番の「ゴールデン・ルール・ホテル」、37番と108番の「横浜ホテル」の三カ所であった。

1875年（明治8）に入り、このホテルはストランドバーグ夫人より、船荷などの荷揚げ人足の斡旋をしていたロプケ（C. Roepke）に譲渡された。ロプケはその後シューメーカー（G. L. Shoemaker）と契約を結んで共同で経営を続けたが業績は上がらず、ホテル経営を断念した。なお、ロプケは1878年の項で再び登場する人物である。

ビリヤード室を含む木造二階建てホテルは、付随してあった馬小屋ともども1877年4月21日にバァーン商会によって公開オークションにかけられたが、⁹⁸⁾結果は不調に終わった。「横浜ホテル」は1877年4月以降は閉鎖され、しばらくの間は借り手もつかないままであったが、この年の10月にニッケル夫人（Mrs. C. Nickel）がこのホテルを譲り受けて、「リトリート」（The Retreat）という簡易宿泊所をこの月の5月にオープンした。ニッケル夫人は石炭販売などを商っていたので、その人足たちの下宿にでもしようと考えたのであった。

「リトリート」は1881年まで続いたが、この間の1878年1月に居留地内で殺人事件が発生した。犠牲者はバーン (**William Bourne**) というイギリス人の男であった。彼は1877年12月の暮れに来港すると、この31日にネベ (**A. Nebbe**) が121番で経営していた「ジャーマン・ターヴァン」 (**German Tavern**) に部屋をとった。衣類や現金の入ったトランクや荷物をこのターヴァンに預けると、翌日には戻るとボーイに声をかけて外にでたまま行方不明となってしまった。

バーンの姿は、翌年1月初めに二、三のバーでみられたものの足取りは完全にとだえた。1月22日になって、彼の死体は前田橋に近い堀割り、つまり108番の「リトリート」のあった向い側の川の中で発見された。この時の報道では、かつて「横浜ホテル」のあった側としているので、「リトリート」が開かれていた時期ではあったが、記者や読者にとっては、まだ「横浜ホテル」とした方がピンとくるものがあったわけである。

横浜居留地には、インやターヴァンと名のつく簡易宿泊所は数多く、それがひとつの特色でもあるだけに、ホテルとは別にその変遷には興味をそえられるものがあるが、本稿ではその大半を割愛せざるをえなかった。

1874年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」 (**Japan Hotel** 44番)

「ブルックリン・ホテル」 (**Brooklyn Hotel** 40番)

「マリーン・ホテル」 (**Marine Hotel** 41番)

「インターナショナル・ホテル」 (**International Hotel** 18番)

「オリエンタル・ホテル」 (**Oriental Hotel** 84番)

「グランド・ホテル」 (**Grand Hotel** 20番)

「オテル・ド・リュニヴェール」 (**Hotel de l'Univers** 168・187番)

「オクシデンタル・ホテル」 (**Occidental Hotel** 18番)

「オテル・デュ・ルーブル」 (**Hotel du Louvre** 164番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 108 番)

1875 年

この年度に「オテル・デュ・ルーブル」が164番より移転し、60－61番で新たにオープンされた。この点は1874年の項で記述しておいた。「カンブリアン・ホテル」という新しい名前を持つホテルが登場するが、これは「マリーン・ホテル」の改称にすぎず、新しいホテルではない。前年度と同じ9軒のホテルが営業を続けていた。

カンブリアン・ホテル

居留地41番にあった「マリーン・ホテル」は、「カンブリアン・ホテル」と1875年に名称を代えた。新しい経営者は、これまで居留地136番で「セイラーズ・ホーム」(Sailor's Home)なるペンションを経営していたルイス(Evan Lewis)であった。

ルイスは1876年1月には居留地81番に移転して、ここで「ブリティッシュ・クイーン・ターヴァン」(British Queen Tavern)を開業するようになるため、「カンブリアン・ホテル」をこの1月4日に処分した⁹⁹⁾。したがって、このホテルの開業期間は1年強で終わった。

「マリーン・ホテル」の項でも触れたが、このホテルから「カンブリアン・ホテル」への改称時期ははっきりしない。1875年を一応のめどとしたが、かつての経営者・ジアレットの足取りからみて、1874年夏頃の開業だった可能性もある。このような小さなホテルは改廃が激しく、明確な日付を限定するのには常に多くの困難が付きまとう。

1875年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 44 番)

「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40 番)

「マリーン・ホテル」(Marine Hotel 41 番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18 番)

「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 84 番)

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20 番)

「オテル・ド・リュニヴェール」(Hotel de l'Univers 187 番)

「オテル・デュ・ルーブル」(Hotel du Louvre 60-61 番)

「オクシデンタル・ホテル」(Occidental Hotel 18 番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 108 番)

「カンブリアン・ホテル」(Cambrian Hotel 41 番)

1876 年

1874 年以降、横浜居留地には 9 軒のホテルがあったが、この年度も数の上ではあまり変らない。1875 年中に 44 番の「ジャパン・ホテル」が火災に遇って一時休業を余儀なくされたが、1876 年には 43 番に再建された。

新顔として「カーティス・ホテル」がこの年に開業されるが、これは「オテル・デュ・ルーブル」の名称を変更しただけのものに過ぎず、新しく建築されたホテルではなかった。

また、「ユーレカ・ホテル」と「インターナショナル・カフェ・レストラン・エ・ホテル」という大変長い名のホテルも登場したが、両ホテルとも新築された形跡はないので、古い家屋を一部改築しただけのものであったろう。ホテルとは名ばかりの簡易宿泊所だが、この二軒を加えると 1876 年中のホテルの数は 11 軒ということになる。

カーティス・ホテル

居留地 61 番の「オテル・デュ・ルーブル」1876 年 11 月に閉業されたあと、これまでもさまざまなホテルの経営を手懸けてきたウィリアム・カーティスがこのホテルの権利を譲り受けて、1876 年 12 月 1 日に「カー

ティス・ホテル」(Curtis' Hotel) として開業した。¹⁰⁰⁾

旅行者や家族向けに改装したこの新しいホテルは横浜の他のホテルより廉価であるとした広告では、昼食 50 セント、夕食 75 セント、月極め食事付きの宿泊料が 40～50 ドルとなっている。ここでは二階の料金が 50 ドルであるのに対して、三階の月極め料金が 40 ドルと階によって 10 ドルもの差があった。

カーティスも新聞広告の中で記載したが、61 番は居留地の中心でホテルの立地条件としては決して悪くはなかったはずだが、なぜか「カーティス・ホテル」を開業して 9 ヶ月たらずのうちにこのホテルの権利をパーシィ商会 (E. D. Percy & Co.) に譲渡してしまった。したがって、「カーティス・ホテル」の名称は 9 ヶ月しか存在しなく、この後ホテル名は「セント・チャールズ・ホテル」と改称された。

来港以降のカーティスの足取りを、いま一度ここにまとめてみると次のようになる。1864 年 10 月 2 日に横浜に着いたカーティスは、この 10 月 8 日から居留地 86 番で「コマーシャル・ホテル」の所有者となり、1871 年 1 月に火災で消失するまでこのホテルの経営を続けた。この間の 1869 年から 1870 年にかけての約 1 年間、同ホテルの経営はウィリアム・トンプソンにまかせていた。

1868 年夏になって、カーティスは居留地 18 番に「インターナショナル・ホテル」を新規開業し、1874 年 6 月 30 日までこのホテルの持ち主であったが、これをパーヴィスに譲渡すると、今度はモスが居留地 44 番で開業していた「ジャパン・ホテル」にまずレストランを開き 1874 年 7 月以降このホテルの経営に乗りだすようになった。しかし、1875 年 7 月にはこのホテルから手を引くと、1875 年夏に戸塚に「カーティス・ハウス」という食堂兼休息所を開いた。このカーティスの茶屋が、この頃から後の名前となる「ホワイト・ホース・ターヴァン」(白馬亭) と呼称されたかは定かでない。

1875 年頃には、コブ商会の馬車が横浜・小田原間を定期的に走り、箱根

へ逗留したり遠出する人たちを運び、さらに郵便物や荷物の運搬もしていたが、戸塚はその中間地点ということで、カーティスの茶屋は大いに重宝された。

1876年12月に入ると、カーティスは居留地61番で「カーティス・ホテル」を経営しだすが、翌1877年8月には早くもこの経営から下りてしまった。ホテル経営を断念した理由は明かではないが、この年の秋には三菱郵船会社の海岸通りにあった横浜支店に雇われたので、彼の船乗りとしての経験がかわれて、三菱郵船から口がかかったことに原因があったのかも知れない。

山手101番に居住しながら三菱郵船会社への勤務は1年で終り、1879年秋には居留地31番で「ザ・コマーシャル」という食堂兼宿泊所の経営にまたも手をだした。「ザ・コマーシャル」(The Commercial)を利用客によっては「コマーシャル・ホテル」とも呼んでいたが、この経営も2年たらずで終わった。

自らホテル王とも名乗ったカーティスのホテル経営は、一応ここで終焉を迎えた。彼が居留地で手懸けたホテルとしては、「コマーシャル・ホテル」(86番)、「インターナショナル・ホテル」(18番)、「ジャパン・ホテル」(44番)、「カーティス・ホテル」(61番)と「ザ・コマーシャル」(31番)の5軒であった。

1881年(明治14)春、カーティスは「コマーシャル・ホテル」をニッケル夫人に譲ったが、この背後には前年の春に戸塚に開いた外国人向けの二階建て洋館である休憩所の経営が軌道に乗ったからであったろう。この休憩所は「白馬亭」と称し、その入口の門先きには馬の首の看板が掛けられていた。

「白馬亭」という食堂兼宿屋を経営するかたわら、カーティスは牛や豚を飼育し、ハムやベーコンの製造・販売に力を注ぐようになり、その製造・販売品目はソーセージ、肉、牛乳、チーズにも及んだ。1865年には、もう

自分の経営する「コマーシャル・ホテル」の裏側で屠殺業を始めたほどであったから、その経験が大いにものをいったわけである。

ところで、日本人としては初めて食肉加工業を始めたという斉藤角次らは、カーティスよりその製法すべてを教えられ、それが「鎌倉ハム」の発端になったという。

カーティスが戸塚にあった茶屋で働いていた日本女性・加藤カネ（益田クニとの説あり）と恋仲となり、柏尾で一緒に暮らしたのは、おそらく1880年以降のことだったと思われる。この結婚が正式なものであったのか、また彼女やふたりの子供がその後どうなったかは十分に追跡ができていない。

戸塚に居を構え、商売の方もかなり安定していたカーティスであったが、1889年から1892年にかけて横浜居留地38番にあったコブ馬車会社（1867年に開業した会社で、居留地31番や61番などでも営業）の経営に参加した。コブ馬車会社は定期的に小田原・箱根にも馬車を走らせていて、戸塚はその中間地点であり、また休息場所でもあったことから、カーティスの参加があった。

1892年に入ると、居留地51番の角で「横浜レストラン」を開業し、また居留地86番で「白馬農場肉店」（**White Horse Farm Butchery**）を1895年に開いたりしていた。これらのレストランや肉店は、戸塚の飼育場から運んできた肉類の販売を目的としたもので、カーティスの商売上手な一面をのぞかせている。しかし、いずれの店も短期間で閉鎖された。

1896年（明治29）以降のカーティスの足取りは明確でない。1864年以降、30年以上にも渡って横浜や戸塚に住み、日本人女性を妻としただけに、この頃に戸塚で逝去したのではないかと推定している。商売気たっぷりのカーティスだっただけに、上海か香港あたりでもう一旗揚げようと彼地に渡ったのであるまいかとも思い、1896年から数年間の郵船の乗客名簿を調べたり、上海の外国人居留者を丹念に調査したが、いずれも成果をあげる

ことはできなかった。

幕末から明治中期にかけ、横浜居留地ではさまざまな面で大活躍した人物だっただけに、他になんらかの記録がどこかに埋もれているはずである。

ユーレカ・ホテル

居留地 128 番のホテルとしては、1866 年から 1873 年にかけて「ベルリン・ホテル」や「ノース・ジャーマン・ホテル」がこの地番にあった。その後、この地番には小さな店舗が開かれたり、また短期滞在者が主としてここに居住していた。

ドイツ人・レッペン (J. A. Repenn) が、この 128 番 B に「ユーレカ・ホテル」(Eureka Hotel) を開いたのは 1876 年 (明治 9) のことであった。ホテル自体は 1881 年まで存続したが、この 5 年間のうちに経営者はいずれもドイツ人であるウエル (F. von Well), フォルハルド (Alex. Vollhard), ペテルセン (L. H. Petersen), ウェルネル (John C. Werner) へと代替わりをしている。

この 128 番とその裏手にあたる 133 番は安宿、簡易食堂、酒場などが次から次と開店したかと思うと潰れていった場所なだけに、「ユーレカ・ホテル」も一年単位で経営者が代わる簡易宿泊所といった様子を見せている。

1875 年頃ともなると、横浜居留地も娯楽が増え、競馬、競艇、射撃、ボーリング、ビリヤード、陸上競技など数多くがひんぱんに開催されホテルを中心に賭け行為が行なわれ、大きな楽しみとなっていた。ボーリング場やビリヤード室のあるホテルでは、よく大会を主催しては人気を煽り、決勝戦では 2 ドルから 5 ドルもの入場料金を取って観客を集めたりしていた。「ユーレカ・ホテル」でも、度々こういったボーリング大会が開かれた。

1880 年 (明治 13) 3 月 1 日にウェルネルが経営者となり、一時閉業していたホテルをオープンしたが、4 月の広告ではボーマン夫人 (P. Baumann) が支配人として記載されている。¹⁰¹⁾これによると一泊料金 1 ドル

25セント、月極めで35ドルの料金で一応中級クラスのホテルの額に相應するものである。

なお、「ユーレカ・ボーリング・サロン」が1872年から1874年にかけて81番にあったが、このホテルとはなんら関係はなかった。

インターナショナル・カフェ・レストラン・エ・ホテル

フランス人のルイ・ベギュー (Louis Béguex) は、居留地81番の一角にハムやソーセージを主とした豚肉製品を販売する店を開き、同時にこれに食堂を併設し、さらに「インターナショナル・カフェ・レストラン・エ・ホテル」(International Café, Restaurant = Hotel) とし宿泊設備も整え多角経営に乗りだした。1876年(明治9)11月のことである。¹⁰²⁾ この長い名称のホテル名は、フランス式に「オテル・アンテルナショナル」と呼称される方が多かったが、わずか半年ほどで店は閉じられてしまった。

ルイ・ベギューはもともと腕の秀れたシェフで、1871年には東京・築地の居留地18番にあった「オテル・デ・コロニー」の経営者のひとりであったが、1873年に新規開業されることになった20番の「グランド・ホテル」の料理長として招かれ、東京より横浜へ住いを変えた。しかし、「グランド・ホテル」では2年間働いたにとどまり、1875年春にここを辞めると再び東京に戻り、竹川町12番に「カフェ・レストラン・アンテルナショナル」(Café = Restaurant International) と称する喫茶店を開いた。¹⁰³⁾ ここで各種のケーキやクッキー類を製造し販売をしていたが、他にもハムやソーセージ、豚の足、豚の胃や腸の味付けした臓、パテなども製造しては築地居留地に住む人たちの好評を博していた。

竹川町12番に開かれたこのレストランは、この5月に入ると隣接地である14番に移転したが、これを増築して同じ年の11月に月極めによる下宿の経営も手懸けるようになった。ベギューのペンションは月極めで30ドルであったから、相場としては横浜居留地のペンションと大差はない。この

ペンションは1年たらずで閉ざされてしまうことになるが、その頃に刊行された東京案内の小冊子に「万国亭」として紹介されているのが、このベギューのレストランである。

1876年（明治9）夏まで竹川町のレストランは開かれていたが、築地居留地の人数は頭打ちとなり、人物往来の烈しい横浜の方が商売には向いていると判断したベギューは、この年の秋に横浜に戻り、もと住んだ81番にまずパン店を開いた。1876年11月7日のことであった。この店に、東京で馴染となった名称を付け加えて、「インターナショナル・カフェ・レストラン・アンド・ホテル」とし、食堂とホテルの経営も始めるようになった。

居留地81番についてはこれまでも触れてきた地番だが、1876年にはドイツ領事館があり、他にボーリング場や小さな宿などがいくつもあった場所だけに、新橋駅から徒歩で数分の所にあった竹川町の「万国亭」に較べると、店としての格は落ちる印象を抱かせる。

ベギューの開いたホテルは半年後の1877年5月2日にオークションで売りにだされることになったため、極く短期間その名を留めたに過ぎなかった。これには、ベギューが1877年夏より3年間のあいだ「横浜ユナイテッド・クラブ」の料理人として雇用されるという事情があつてのことであつた。

居留地5番の「横浜ユナイテッド・クラブ」は、1884年（明治17）1月11日にホテルとして若干の手直しがなされ、「クラブ・ホテル・ヨコハマ」としてオープンされた。この「クラブ・ホテル」は当初クラブによって賃貸しのホテルとして発足したものであつたが、ベギューがこれを借り受け、結婚して間もない夫人と共にその経営にあたつた。ベギューがこのホテルに関係したのは1886年4月までで、競争の激しい横浜でのホテル経営を断念し、神戸か長崎で同じ商売を始めようと彼はこの間にも熟慮していた。

自分の料理人としての腕を持っていればどこでも喰えるという自信があり、また先を読むことに長けたベギューは、1886年5月2日に夫人と子

供ふたりを連れて神戸へ向った。神戸に到着するとすぐ、神戸税関に近い居留地 122 番に「レストラン・フランセ」(**Restaurant Français**)を開くと、パンや洋菓子の製造・販売をし、そのかたわら洋食店も経営しだした。

ここでの商売は順調に進み、神戸でも好意をもって迎へられていたが、さらに一層の飛躍を夢みたベギューはホテルの経営にも乗りだした。神戸の仲町と京町の交差する角に「オリエンタル・ホテル」(**Oriental Hotel**)を建てて、新規開業させるのは 1887 年(明治 20)のことで、その位置は地番でいえば 80 番であった。

ベギューの「オリエンタル・ホテル」は、その後に別館を新築したりして神戸最大のホテルとして発展することになるが、1896 年(明治 29)にベギューはこのホテルを売り払ったことにより、イギリス人の手で株式組織として経営されるようになっていった。なお、海岸通り 6 番に新築される「オリエンタル・ホテル」は 1907 年(明治 40)に建設されたもので、5 階建て屋上に庭園を設け、専用バス付きの客室を有する近代的なホテルであった。

1876 年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」(**Japan Hotel** 43 番)

「ブルックリン・ホテル」(**Brooklyn Hotel** 40 番)

「インターナショナル・ホテル」(**International Hotel** 18 番)

「オリエンタル・ホテル」(**Oriental Hotel** 84 番)

「グランド・ホテル」(**Grand Hotel** 20 番)

「オテル・ド・リュニヴェール」(**Hotel de l'Univers** 187 番)

「オテル・デュ・ルーブル」(**Hotel du Louvre** 60-61 番)

「横浜ホテル」(**Yokohama Hotel** 108 番)

「カンブリアン・ホテル」(**Cambrian Hotel** 41 番)

「カーティス・ホテル」(**Curtis' Hotel** 60-61 番)

「ユーレカ・ホテル」(Eureka Hotel 128 番)

「インターナショナル・カフェ・レストラン・エ・ホテル」(International Café, Restaurant et Hotel 81 番)

1877 年

この年度の新しい名称のホテルとしては、「セント・チャールズ・ホテル」と「フーツ・ホテル」の二軒があるが、前者は「カーティス・ホテル」の名称を改称しただけのものに過ぎない。「フーツ・ホテル」が一軒増えたが、前年中に「カンブリアン・ホテル」が閉業したので、ホテルの数としては前年度と変化はなく、11 軒のままである。

この年の 2 月に西南の役が勃発し、国内はそのため大きく混乱した。

セント・チャールズ・ホテル

「カーティス・ホテル」が閉鎖されたあと、若干の手直しがなされ、居留地 61 番に「セント・チャールズ・ホテル」(St. Charles Hotel)が開業された。持ち主はパーシイ (E. D. Percy) というイギリス人であったが、経営の方はハッセル (T. Hassel) に任せられた。

1877 年 9 月 1 日のオープンではあったが、持ち主のパーシイが三菱郵船会社で働くようになった都合もあって、翌 1878 年 6 月 26 日には早くもこのホテルは閉ざされ、その後に「セントラル・ホテル」が 7 月 1 日に開業した。¹⁰⁴⁾先の「カティス・ホテル」が 9 ヶ月と短命なら、この「セント・チャールズ・ホテル」もそれに負けじと 10 ヶ月と持たずに終わったホテルであった。¹⁰⁵⁾

なお、1877 年 9 月 1 日にこのホテルがオープンされた丁度その日に、かって「マリーン・ホテル」を経営していたジャレットがパトロンとなり、同夫人の手で 61 番に「パンション・ブルジョワーズ」(Pension Bourgeoise)が開かれた。

フーツ・ホテル

明治初年に居留地5番の「横浜ユナイテッド・クラブ」のボーリング係やステュワードをしていたイギリス人のフート（C. Foote）は1874年に87番に移ると、この地番にクラブを創りそのマネジャーをしていた。このクラブは初め「フーツ・クラブ」（Foote's Club）と称し、後で「イースタン・クラブ」（Eastern Club）となったが、1877年2月26日にこれを「フーツ・ホテル」（Foote's Hotel）と改称してオープンしていった。

このホテルの規模などを記したものはないため一切不明だが、後述するようにどうやら賭け好きの人達のたむろす場所であつたらしい。この点は1875年11月のワグマンの絵の中で、それらしい様子が描かれている。

1877年頃ともなると、居留地にはクリケット、ボート、ライフル、フットボールなどさまざまなクラブが設立され、そこに住む人たちの大きな憩いとなったが、春や秋に定期的に行われる競馬は、なんといっても彼らの最大の楽しみのひとつであつた。競馬といっても、今日のように大型のサラブレッドやアラブ馬の競走でなく、国産か中国産のポニーが中心で、騎手の方もずぶの素人も乗馬できるというものであつた。

それでも、重賞レースもあれば障害レースもあり、「クラブ・カップ」や「アメリカン・カップ」などの賞を競ったが、ジョッキーのためには敗者復活戦まで用意されたりもしていた。一日平均10レースが開催されたが、障害レースや一周レースは危険が伴うこともあって、これには専門のジョッキーしか騎乗できなかった。

「横浜ジョッキー・クラブ」の競馬は純然たる賭け競馬で、競馬の始まる前はこの「フーツ・ホテル」で予想配当や賭け率が示され、馬券が売られたこともあって大変な賑いをみせた。この頃の「フーツ・ホテル」の広告には「賭け競馬」（Sweepstakes）と大書きし、競馬をあしらった図版が掲げられたものも見受けられるだけに、¹⁰⁶⁾ 宿泊の方には力を入れてなかった様子である。

「フーツ・ホテル」は、1884年12月に持ち主のフーツが死亡する前年まで営業が続けられたが、1883年中には「アスター・ハウス」と改称され、さらに後に「ハフカルズ・ホテル」が移転開業したり、レオン・ミュラーの「オリエンタル・ホテル」がこの87番でオープンするようになっていった。

レオン・ミュラーが居留地11番に「オリエンタル・ホテル」を開く前に、まず87番で開業したのは、この二階建ての「フーツ・ホテル」の建つ地番は義父のものだったからである。つまり、レオンはフーツの娘と結婚したことで、ホテルのコック稼業よりホテル経営に身を入れるようになった。

1877年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 43番)

「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

「オリエンタル・ホテル」(Oriental Hotel 84番)

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20番)

「オテル・ド・リュニヴェール」(Hotel de l'Univers 187番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 108番)

「カーティス・ホテル」(Curtis' Hotel 60-61番)

「ユーレカ・ホテル」(Eureka Hotel 128番)

「インターナショナル・カフェ・レストラン・エ・ホテル」(International Café, Restaurant et Hotel 81番)

「セント・チャールズ・ホテル」(St. Charles Hotel 61番)

「フーツ・ホテル」(Foote's Hotel 87番)

1878 年

前年度中に、108 番の「横浜ホテル」など三軒のホテルが閉鎖され、また「オリエンタル・ホテル」もこの年度に店を閉めるので、ホテル数は減少傾向をみせている。

この年の新しいホテルとしては、「セントラル・ホテル」、¹⁰⁷⁾「クローセン・ホテル」と 70 番の「横浜ホテル」があるが、いずれも改称しただけのもので新築したホテルではなかった。

セントラル・ホテル (60 - 61 番)

居留地 60・61 番の「セント・チャールズ・ホテル」は 1878 年 6 月 26 日に閉ざされたあと、これを「セントラル・ホテル」として翌 7 月 1 日よりジョン・ヘンソン (John Henson) が経営することになった。ただし、ホテルの手直しなどのために、¹⁰⁷⁾実際の開業は 7 月 24 日頃までずれ込んだ。

居留地 59 番に雑貨・衣類などを中心に代理店などをもしていた「カービー商会」(Kirby & Co.) があったが、これが「セントラル・ホテル」の持ち主で、ヘンソンの方は支配人として雇用されていたに過ぎなかった。

1879 年 (明治 12) 1 月より支配人はヘンソンよりシンプソン (C. R. Simoson) に代ったが、この年の 7 月 23 日にまたも 61 番で火災が発生した。1874 年 9 月にこの地番は一度火事をだしたところだっただけに、その経験を生かして家屋と家屋との間に空間をとり、さらにブロック塀で仕切りをするなどの対策を講じていた。

しかし、この地番にあった代々のホテルが、ビリヤード室を設けたり建て増しをしていったため、薬屋のノース・トンプソン商会や文具店のサーヂェント・ファルサリ商会などとは軒先が重なるほどになっていた。

1879 年 7 月 23 日に「セントラル・ホテル」の台所よりだした火事は、1 時間たらずの内にこれらの商会を焼き尽くした。¹⁰⁸⁾三階建てのホテル正面が焼け落ちる時には、本町通りを挟んだドイツ領事館にも延焼するのではな

いかと思われたりもした。この日は山手公園で屋外オペラの公演会や盛大な花火大会が開かれ、居留民の多くはここに集まっていたこともあって大きな騒乱を巻き起こした火災となった。

消防隊の到着はかなり遅れたが、ホテルの前に数百本もの飲料水・ラムネが運びだされて、それが飲み放題だったことから人足が大勢集まり、荷物の運搬に協力をした。この火災の損害は8万ドルにも昇ぼり、またビリヤード台を外にだすのを手伝っていたフランス郵船に勤めるある日本人が転倒し、ビリヤード台の下敷きとなって死亡するという惨事にもなった。

1879年の火災のあと、同じ地番に「セントラル・ホテル」がすぐに再建され、1879年12月1日よりハッセル (T. Hassel) によって1884年まで経営された。

居留地60－61番のホテルは、1875年1月以降「オテル・デュ・ループル」, 「カーティス・ホテル」, 「セント・チャールズ・ホテル」, 「セントラル・ホテル」と短期間のうちに代替わりをしていった。

クローセン・ホテル

1867年に居留地133番で「コスモポリタン・ホテル」を開いていたデンマーク人・ピーター・クローセンは、その後さまざまの変転を見ながらも、再びこの133番に戻り、1872年から1877年暮れまで「ユニオン・サロン」という酒場兼宿泊所を経営していた。

1877年12月18日にヨーロッパに旅立ち、翌1878年8月17日に横浜に戻ったクローセンは、このサロンの隣地にホテルを建設すると、「ピーター・クローセン・ホテル」 (Peter Claussen Hotel) として同年10月19日にオープンした。二階建て木造のホテルであったが、このあたりではかなり大きな建物であったというから、少なくとも20室あまりの部屋数はあったものと思われる。

1881年3月11日午前2時、火災を知らせるベルが鳴った。¹⁰⁹⁾ 火元は「ク

ローセン・ホテル」で、人口の密集し小さな店舗の多い一角であり、さらに前年の暮れにも広く焼けだされた地番であったから、すぐに消防隊が集まり消防ポンプも集結した。居留地の火災はいつもそうであったが、この時も放水に意外と手間どっている間に、「クローセン・ホテル」は炎に包まれ、細い道を挟んだ132番の中国人が所有する大きな薬店・永徳堂に飛び火し、これを完全に燃やし尽くした。この日はたまたま雨が降っていたという幸運も手助って、居留地132－133番一帯だけの火災ですみ、「クローセン・ホテル」と同じ地番にあった「ヨーロッパ・ホテル」の方は風向きに助けられ焼けだされずにすみ、火災は発生から2時間後の午前4時にやっと鎮火した。火災の原因は、ランプを倒したことによるものだった。

「クローセン・ホテル」の当日の宿泊客は少なかったものとみえ、真夜中の火災であったにもかかわらず犠牲者は同ホテルに宿泊中のスエーデン人の船員ひとりだけであった。このスエーデン人はかつてロシア船の乗組員であったが、日本に留まり三菱郵船に雇われることになった人物だったというから、山手外人墓地に国籍不明のまま埋葬されているラングウィスト (G. Langwist または Landquest) その人だったと判断される。

ところで、クローセンはこのホテルには保険を一切掛けていなかった上、帳簿や貸付伝票をも失ったため、彼に対して負債のある人は迅速に名乗りでて支払いをするよう呼びかけたのであった。火災の多い居留地であった割に、火災保険を掛けない店舗は実に多くあって、後に泣く目に遇うのだが、この点大手の中国人は実にしっかりとしている。この火災で全焼した132番の永徳堂薬店は、きちんと2000ドルもの火災保険に入っているという手堅さをみせている。

火災で完全に消滅した「クローセン・ホテル」であったが、1881年中には新たにホテルを建築し、同地番に同名のホテルをクローセンはオープンした。しかし、クローセンは1883年に横浜を離れたため、その後はワーナー (John Werner) により1年間経営がなされ、1884年からはランドベ

ルグ夫人 (**Mrs. C. A. Lundberg**) に引き継がれていった。ランドベルグ夫人は1886年より居留地52番の「コロニアル・ホテル」の経営をするようになったため、1885年中に「クローセン・ホテル」の経営を止めた。このため、「クローセン・ホテル」の名称は1885年になくなった。

1885年以降、このホテルはフランス人のサルディニュ (**D. Sardigne**) に譲り渡され、「オテル・デュ・コメルス」と名前を改め1900年代に至るまで営業が続けられていくことになる。

焼けだされた者には気の毒だが、1881年(明治14)度における居留地の火災は例年に較べると幸いにも少なく、山手を加えてもわずか6件しか発生しなかった。つまり、山手居留地の63番と69番、この「クローセン・ホテル」のあった132－133番、フランス人のガストン・ガリー (**Gaston Galy**) や写真家・ベアトー (**Felix Beato**) らの住いのあった164番、三菱郵船会社の製帆所、それと平野富二の経営する製鉄所の六カ所であった。

1881年10月11日に平野製鉄所が焼けたが、この位置は堀割り(運河)側の横浜本村にあり、1865年(慶応元)に幕府が横須賀製鉄所(造船所)に先がけて設立した横浜製鉄所の建物であった(現在の根岸線石川町駅近くで、かつてここに碑が建てられていた)。

横浜製鉄所は横須賀製鉄所の予備的な性格の機関で、一時期郵便汽船会社、三菱郵船会社、さらには高島嘉右衛門らに転貸しされてもいた。平野富二は衰退の途をたどっていた横浜製鉄所(製作所)に目をつけ、当時この製鉄所を所轄していた内務省や海軍省となん度も交渉し、1880年(明治13)1月1日より1889年12月31日までの10年間政府より借り受けることに成功した。

平野はこれを横浜石川口製鉄所とし、一方東京には石川島製鉄所を建設して、蒸気船や帆走船の建造、蒸気機関や各種の汽罐類を製作しては巨額の富を得ることになったのであった。

横浜ホテル（居留地 70 番）

居留地 108 番の「横浜ホテル」をストランドバーク夫人の後を継いで経営していたロプケ夫人は、1877 年にこのホテルをニッケル夫人（Mrs. Nickel）に譲った。これは、どうやらこの年の秋に戸塚でオープンした「ゴールデン・ルール・ホテル¹¹⁰⁾」と関連があったようだが、完全には裏がとれない。ただ、ロプケ夫人は一時期横浜居留地にいなく、1878 年にここに戻って再びホテル経営にのりだすので、この戸塚の「ゴールデン・ルール・ホテル」を彼女が経営していたとすれば、横浜不在の理由もまた時間的な空白も説明がつく。1871 年にオープンされた居留地 70 番の「ゴールデン・ルール・ホテル」の名前を思い出してつけたものであろう。

居留地 70 番の「横浜ホテル」は 1878 年から 1880 年にかけてロプケ夫人によって経営されたが、この間にあって特に新聞広告などはなく、利用者の記録もない。

1878 年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」（Japan Hotel 43 番）

「ブルックリン・ホテル」（Brooklyn Hotel 40 番）

「インターナショナル・ホテル」（International Hotel 18 番）

「オリエンタル・ホテル」（Oriental Hotel 84 番）

「グランド・ホテル」（Grand Hotel 20 番）

「オテル・ド・リュニヴェール」（Hotel de l'Univers 187 番）

「ユーレカ・ホテル」（Eureka Hotel 128 番）

「セント・チャールズ・ホテル」（St. Charles Hotel 60-61 番）

「フーツ・ホテル」（Foot's Hotel 87 番）

「セントラル・ホテル」（Central Hotel 60-61 番）

「クローセン・ホテル」（Claussen Hotel 133 番）

「横浜ホテル」（Yokohama Hotel 70 番）

1879 年

新しいホテル名としては「オテル・ペイル・フレール」が出現するが、これは居留地 84 番にあった「オリエンタル・ホテル」を改称しただけのものであった。また、「ジャーマン・ホテル」と「カリフォルニア・ホテル」が新たに登場するが、いずれも新規開店されたものでなく、単なる改称だったようである。ホテル数は前年より三軒増え、14 軒となった。

この頃の横浜居留地の欧米人の数は1,360名ほどで、明治元年(1868)が570名であったからかなりの増加をみせた。これが明治30年(1897)となると2,100名となった。流行はいつの世にもあったらしく、1879年(明治12)の居留地内では「珊瑚珠の簪^{かんざし}」がはやり、外人女性の八割方がこれを頭に挿していたという。また、この年は虎列刺^{コレラ}が国内で蔓延したが、居留地も例外でなくコレラの猛威で命を落とした人は多きに昇った。

オテル・ペイル・フレール

フランスのモーリイで大きなパン店を開いていた「ペイル父子商会」のサミュエル(Samuel Peyre)とジャン(Jean Peyre)の兄弟が1875年(明治8)に来日し、1875年12月17日に居留地80番に「ペイル・フレール」(Peyre Frères)商会を設け、ここで洋菓子店を開業した。

居留地80番は本稿でしばしば触れている地番だが、ペイル兄弟商会が店を開いた時には、本町通りを挟んだ向い側には「オテル・デュ・ルーブル」があり、この洋菓子店のすぐ裏手にはフランスのカトリック教会(天主堂)があった。

「ペイル・フレール」と同じ並びの84番にはボナの経営する「オリエンタル・ホテル」があったが、1878年6月にボナが「グランド・ホテル」を入手し、この経営に乗りだしたため、「オリエンタル・ホテル」の後にペイル兄弟が移転することになった。¹¹¹¹

1878年(明治11)6月24日に80番より84番に転居したペイル兄弟は、

すぐにはホテル業には手をださず、ここでもパイを中心とする洋菓子の製造・販売を続けた。

1879年に入ると、ユージェーヌ（Eugène）とジュール（Jules Peyre）の兄弟がさらに来日し、彼らはこの洋菓子店に喫茶店を設け、さらに「オテル・ペイル・フレール」を開業した。1879年6月15日のことであつた。¹¹²⁾ その後の1881年6月にはこのホテルに「ジャルダン・デテ」（Jardin d'Été）というしゃれた喫茶店を併設し、ペイル兄弟による経営が続いていった。

ペイル兄弟には先の四人の他にもうひとりマチュー（Matieu Peyre）もいて、彼も来日したが、日本に永年滞在したのはユージェーヌで、彼は後にフランス海軍の御用達店として食料品や酒類の輸入・販売に力を入れ、明治30年代に入っても横浜に留まった。

「オテル・ペイル・フレール」は1879年6月より1882年暮れまで84番にあつたが、1882年12月4日に隣地の85番に移転したことで、ジュールの代にホテル経営から完全に手を引いた。この85番が、その後のペイル兄弟商会の本拠地となつたところであつた。

1881年6月1日、イギリス人のアーサー・クロウ（Arthur H. Crow）が来日し、1年以上に渡って内陸を旅し、帰国後の1883年にロンドンで『日本の公道と間道』（“Highways and Byeways in Japan”）を刊行した。この書の中で、クロウは「オテル・ペイル・フレール」に宿泊したことを記述しているが、ホテルの規模や印象についてはほとんど触れていない。ただ、あちこちの日本の旅館を泊まり歩いた後で横浜に戻ったクロウは、卵と米とノミに悩まされた布団に代って、ホテルでの洋食と快適なベッドに、いかにも安堵し満喫した様子をみせているにとどまっている。¹¹³⁾

多くの旅行者がそうであるように、各国の大きなホテルを泊まり歩いてきた者にとっては、横浜の小規模なホテルではなんの感慨も呼ばなかったのは当然であつたろう。それでいて、箱根の「奈良屋ホテル」と「富士屋ホテル」、京都の「也阿弥ホテル」や日光の「金谷ホテル」など日本の旅館

の印象記はずいぶんとある。クロウにしても、これらのホテルでの感想を語っているが、そこで受ける接待、だされる食事はいちいち目新しいことばかりであったから、好奇心の強い旅行者が斬新な印象を日本旅館に向けて記述するのもむりはない。

ところで、「オテル・ペイル・フレール」はホテルとしてより、むしろレストランの方が有名であった。とりわけこのコーヒーは本格的な味のものであったから、東京に住む外国人はこの店のコーヒー豆をなんとか手に入れたがっていた。裏から手を回して、主人のペイルに頼み込んでも、なかなかコーヒー豆は譲ってもらえなかったという。

このホテルの隣り 85 番には、ビンセント夫人 (Mme. E. A. Vincent) の経営する洋装店があった。この店は主に婦人用品と子供向けの洋服を扱っていたが、年中いつも在庫が豊富なわけではなかった。このため、フランスから船が入港したあと、最新流行のドレスや帽子などを求めに、横浜はもとより東京からも大勢の婦人たちがこの店を訪れ、店内はごった返えしたものであった。ビンセント夫人の店で洋服選びをし、隣りのペイル・フレールの店で、美味しい食事を満喫しながらおしゃべりをするのが、婦人たちの大きな楽しみでもあった。

勝海舟の三男・梅太郎と後に結婚するアメリカ人・クララ・ホイットニーは再三に渡ってペイル・フレールのレストランで食事をしたことを書いているが、女性たちの間では「グランド・ホテル」のレストランより人気があったのである。

「グランド・ホテル」のレストランの方は、紳士や家族連れのための贅沢に利用されたのに対し、ペイル・フレールの方は上品な女性がコーヒーやアイスクリームを楽しむといった店であった。このレストランにほど近い 81 番はいくつもの喫茶店が密集していたところだが、こちらの方は少し客層の落ちる女性が集まった。このため、船乗りたちが女性を目当てにたむろし、口論や喧嘩は日常茶飯事で、ひどい時にはコップの投げ合いから始

まり、店全体が破壊されるまでの大騒動すら起こされた気の毒なサロンもこの地番にあった。

なお、84番のこのホテルの後には、またも別な名称を持ったホテルが開かれるようになるが、これは1883年の頃で触れることにする。

ホテル史とは関係のない事柄だが、コーヒーに関するおもしろい口上があるので、ペイルのコーヒー豆とからめて紹介しておく。日本におけるコーヒー飲用の歴史にかかわる文献等は600点を越し、1795年刊の「長崎聞見録」には「かうひいは、蛮人煎飲する豆にて、その形白扁豆の如く。その色真黒に成程に炒りて、日本の茶をのむごとく、常々服するなり」ともう紹介している。さらに、1797年にオランダ人が長崎の遊女に「コヲヒ豆」をプレゼントした資料（「遊女賞品目録」）もあるように日本でのコーヒーの歴史は古い。

横浜でも開港と同時にコーヒーは入ってきて、当然これはレストランなどでも提供されたはずだが適切な記録はない。ただし、1864年3月にフランス人のルノー（Renaud）が「アリエ・カフェ」（Alliés Café）を開き、さらにこの年に「グラン・カフェ・デュ・ジャポン」なる店が開店されている。ビリヤードを楽しみながらコーヒーを飲むという生活がある程度定着するようになるのは、どうやらこの頃からであったらしく、1865年に入ってまもなく根岸湾の新道沿いや地蔵坂の上にコーヒー店が開かれた。

ところが、コーヒー豆を販売するといった記録は意外になく、丹念に新聞広告などにも注意して調べてみたが、次に示す1875年（明治8）の広告が最も古いものであった。この広告主が横浜ではなく、東京であったのが注目される。

^{Coffee} 「加非」

右ハ今般拙店におゐて横浜本町通り佛蘭西五十六番「シイーキリス」氏（に）傳習大器械をもって「コヒー」製造其種及其精味を窮極め、且其價

を廉にして専ら此業を弘めんとす。因て、四方の諸君御来車の上、多少を不論、各其好む所に随て御用向の程命ぜられんことを希ふものハ

亥一月 東京南槇町三番地 泉水新兵衛」(括弧内および句読点は筆者)

この広告は「読売新聞」の明治8年2月1日と3日、それと同年4月下旬から5月上旬にかけて数回に渡って掲載された。「読売新聞」は発行されて間もない明治8年から急激に発行部数を延ばすようになるので、広告はこれで充分と想ってか「郵便報知新聞」や「横浜毎日新聞」などにはこの広告はない。

引用した先の口上の箇所では省略したが、最終行の住所と氏名の箇所にはローマ字での併記がされている。これで見ると、欧米人を目当てにした広告だったとみなされ、さらに「御来車」とあるからには横浜から新橋にくる顧客を獲得しようとして意図していたのだろう。

横浜居留地「佛蘭西五十六番シイーキリス氏」なる人物と店舗は全くわからない。居留地56番は早くから輸入商会・マーカス (**Marcus & Co.**) の店舗のあった地番だが、1874年より1880年にかけて食料品を商うマイエ商会 (**A. Maillet & Co.**) が同地番にあった。このフランス商・マイエのところに先の人物がいれば問題がないのだが、居留者名簿から捜しだすことができない。

隣地にあたる居留地54番にクニフラー商会 (**L. Kniffler & Co.**) があり、ここに働く人物に「シー・イリス」(**C. Illies**) なる者がいたので、これとなんらかの関連があったのかと想像をたくましているに止まっている。

ジャーマン・ホテル

居留地179番はかつて「ジャーマン・クラブ」のあったところだが、この地番の一角に「ジャーマン・ホテル」(**German Hotel**) がフォルハルト (**Alex. Vollhardt**) によって開かれた。このホテルの規模や正確な開業日は

不明だが、1879年末の開業で、おそらくここにあった「ニューヨーク・サロン」(New York Saloon)を改築したものとみなされる。「一級のワイン、家具付きの美室」との広告だけが残されている。¹¹⁴⁾

1882年に入って新しくビリヤード室が併設されたが、ホテルとはいえむしろ酒場という雰囲気のものであった。「ジャーマン・ホテル」は1884年(明治17)まであったが、この後に同じドイツ人のウイト(H. C. N. Witt)に譲渡され、1884年から「コンコルディア・ホテル」(Concordia Hotel)と名称を改められた。

「コンコルディア・ホテル」は1893年までこの番地にあったが、その後は経営者が代わって「セントラル・ホテル」と改められていった。

カリフォルニア・ホテル

「ジャーマン・ホテル」のあった179番の一角に、別に「カリフォルニア・ホテル」(California Hotel)と称するホテルもあった。このホテルはフレイバーグ(R. Freyberg)が経営したものだが、以前に開店されていた「カリフォルニア・サロン」(別名「カリフォルニア・ハウス」ともいった)を単に名称を替えただけのものであった。

居留地179番はA地番とB地番とに分けて貸し与えられていた地番で、両方を合わせた総坪数は437坪であったが、「ジャーマン・クラブ」が他に移転したあと細かく分割され、小さな店舗、船大工、個人住宅などがひしめきあっていた場所であった。「カリフォルニア・ホテル」が営業をしていた1879年後半は、二軒のホテルの他に雑貨商や輸入商など五軒もが店を開いていたので、このホテルの規模もしれたものだったわけである。なお、このホテルは1880年中には閉ざされてしまった。

コマーシャル・ホテル

居留地31番に1879年秋より1881年春にかけて「コマーシャル・ホテル」

がカーティスの手で経営されていたが、もともとはマックカンスの「ザ・コマーシャ」の跡を継いだものであった。カーティスとしては、1864年に86番でオープンした「コマーシャル・ホテル」があったので、二代目の同名のホテルの持ち主となったことになる。

31番の「コマーシャル・ホテル」は1881年4月4日にまず家具、寝具、調理用品、食器やピアノが売りにだされ、¹¹⁵カーティスはこのホテルを手離した。これを入手したのが本稿でたびたび顔をだすニッケル夫人であったが、カーティスとニッケル夫人については1876年の「カーティス・ホテル」や1881年の「コマーシャル・ホテル・アンド・ビリヤード・ルーム」でも少し詳しく記述しておいたので、ここでは重複を避ける。

1879年に横浜にあったホテル

「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 43番)

「ブルックリン・ホテル」(Brooklyn Hotel 40番)

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20番)

「オテル・ド・リュニヴェール」(Hotel de l'Univers 187番)

「ユーレカ・ホテル」(Eureka Hotel 128番)

「フーツ・ホテル」(Foote's Hotel 87番)

「セントラル・ホテル」(Central Hotel 60-61番)

「クローセン・ホテル」(Claussen Hotel 133番)

「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70番)

「オテル・ペイル・フレール」(Hotel Peyre Frères 84番)

「ジャーマン・ホテル」(German Hotel 179番)

「カリフォルニア・ホテル」(California Hotel 179番)

「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 31番)

1880 年

前年に居留地 43 番にあったモスの「ジャパン・ホテル」と、居留地 40 番に 1869 年以降あった「ブルックリン・ホテル」は閉鎖された。「ブルックリン・ホテル」の後に開業されるホテルを「ジャパン・ホテル」といったので、1879 年中に閉じられた 43 番の「ジャパン・ホテル」と、1880 年開業の 40 番の「ジャパン・ホテル」は別のものである。

この年の 7 月に山手 68 番に「チボリ・ガーデンズ・ホテル・アンド・レストラン」(Tivoli Garden's Hotel & Restaurant) がフランス人の手でオープンされた。居留地時代での山手地区のホテルは 7 軒を数えたが、これらのホテルについては別に章をおこして後述する。

この年度のホテル数は山手を除き 14 軒と前年と同じで、1874 年以降 9 軒から 14 軒のあいだで安定している。この程度の数で、充分に需要に応えられたということになる。

「ヨーロッパ・ホテル」

居留地 133 番は長い間クローセンが「ユニオン・サルーン」を開いていたところだが、クローセンが 1877 年暮れに横浜を一時離れたとき、このサルーンはジャンソン (M. H. Jansson) に貸された。1879 年に入ると、「ユニオン・サルーン」はウイト夫人 (Mrs. S. Witt) の経営するところとなり、1880 年にこれを「ヨーロッパ・ホテル」と改めた。ホテルとはいえ、木造二階建ての部屋数は 10 室あまりの規模だったというから、さしずめ下宿屋とでも呼称した方がよいものであった。

ウイト夫人の経営する「ヨーロッパ・ホテル」は、同じ 133 番の一軒おいた先の「クローセン・ホテル」より出した 1881 年 3 月の火災の際には、消防隊の尽力により奇跡的に延焼を免れた。しかし、この火災のあと彼女はホテルの経営を諦めて、133 番からさほど遠くない 168 番へ転居した。この後を受け継いで、このホテルの経営に乗りだしたのが、イギリス人のハ

スケル (W. Haskell) であった。

1881年初め、133番の地番には「クローセン・ホテル」とウイト夫人の「ヨーロッパ・ホテル」があったが、この二軒のホテルの間に挟まれて「サンプル・ルームズ」(Sample Rooms)という簡易宿泊所があった。1881年3月の火災で、この「サンプル・ルームズ」はもらい火を受けて焼け落ちたが、この持ち主であったハスケルが隣りの「ヨーロッパ・ホテル」の経営を継続していくことになった。

ハスケルが経営した「ヨーロッパ・ホテル」は、オープンして1年ほどで閉じることになったため、133番のホテルとしては、火災後に新築される「クローセン・ホテル」(後に「オテル・ド・コメルス」と改称)だけが長い間に渡って営業が続けられていったことになる。133番のホテル業から手を引いたハスケルは、他所に住いを移し洋酒の輸入・販売を手懸けるようになったが、1885年に入るとまたもホテル経営に手をだすことになる。

133番の「ヨーロッパ・ホテル」は、1880年から1882年にかけての短期間オープンされただけであったが、前年の1年はウイト夫人が、後半はハスケルが経営するようになったその直接の原因は、この地番で発生した火災にあったのである。

なお、「ヨーロッパ・ホテル」の名称は後年さらに登場することになるので、便宜的に後述する1895年の「ヨーロッパ・ホテル」の個所でまとめることにする。

ジャパン・ホテル

1869年(明治2)以降約10年間40番にあった「ブルックリン・ホテル」は、1879年10月に所有者であったB. ハロルドの死去に伴い、この年の暮れに売りだされた。しかし、翌1880年春になるまで借り手も買い手もつかずにいたが、ブロックレイ夫人(B. Blockley)が、これを手に入れると若干の改修をして、1880年6月3日に「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel)

としてオープンした。¹¹⁶⁾

ブロックレイ夫人は築地居留地17番にあった「江戸ホテル」にたずさわ
り、そこから横浜に移ると26番で「ラス・ハウス」(Russ House)という
ビリヤード台を持つ酒場兼宿泊所を開いていたから、ホテル経営は手慣れ
たものであった。

「横浜ユナイテッド・クラブ」の裏手で「ラス・ハウス」が開かれたのは
1878年6月15日であったから、約2年の間夫人はこの宿泊所を経営してい
たわけである。

この40番の「ジャパン・ホテル」のすぐ近くには、1879年までモスが経
営していた「ジャパン・ホテル」があったため、彼女はこの名称を思いつ
いたのであった。

40番の「ジャパン・ホテル」は1883年まであったが、この年に「オクシ
デンタル・ホテル」と名称が変更された。しかし、経営はそのままブロッ
クレイ夫人が続けたが、1886年以降から経営はラメージ (W. J. Ramage)
に代替わりし、1890年まで「オクシデンタル・ホテル」は存続していった。

オテル (・エ・レストラン) ・デ・コロニー

1880年(明治13) 10月8日、フランス人パデル (Henri Padel) はデ
シャネル (A. Deschanel) と共に出資し、3年の契約を結び本町通り52番
に「オテル・エ・レストラン・デ・コロニー」(Hotel et Restaurant des
Colonies) を開業した。¹¹⁷⁾ 52番の地所は367坪で、この年代には他に6軒の
家屋があったから、ホテルとはいえかなり規模の小さかったものであった。

パデルは居留地134番にあったフランス横浜郵便局の事務員などをして
働いていた人だが、1881年(明治14) 4月24日にこの郵便局長であった
デグロン (Henri Degron) の帰国に際し、パデルも行動を共にし一時横浜
を去った。このため、ホテルの方は1881年4月11日以後デシャネルひと
りによる経営となり、ホテル名を「オテル・デ・コロニー」と改めること

になった。¹¹⁸⁾

デシャネルは1875年代には箱根の宮ノ下や木賀などでレストラン経営に加わり、その後ボナが居留地84番で開いた「オリエンタル・ホテル」のコックとして働いていた。明治8年代には、フランス人料理人がもう箱根で商売をしていたわけだが、デシャネルは1875年の夏の期間だけ働いたようである。この頃の新聞広告によると、箱根の「オテル・レストラン」の持ち主は「タケガワ」某となっているので、日本人による経営のようにもみえるが、ホテルの名称などからみて、東京の竹川町で「カフェ・レストラン・アンテルナショナル」を開業していたルイ・ベギューがその経営者であったとみなしてよいだろう。

デシャネルの料理人としての腕は確かなものであったから、「オテル・デ・コロニー」はホテルそのものより食事の方が好評であったが、1883年(明治16)9月初旬をもって閉業されてしまった。閉業されたこのホテルは、イギリス人のバチェラー(T. Batchelor)にすぐに譲り渡され、バチェラーはこの年の10月に「コロニアル・ホテル」と英語表記に改めて、これを経営していった。

「コロニアル・ホテル」は1887年(明治20)まで存在したが、1886年秋から1年間はランドベルグ夫人(Mrs. C. A. Lundberg)によって経営された。なお、同夫人が経営したとき「ブリューンズウィック・ホテル」(Brunswick Hotel)とさらに名称を代えた形跡がある。

1887年秋からはウェールズ夫人(Mrs. A. Wales)が経営権を握って、名前を「横浜ホテル」と改めたが、このホテルは2年間開かれただけであった。

1880年に横浜にあったホテル

「インターナショナル・ホテル」(International Hotel 18番)

「グランド・ホテル」(Grand Hotel 20番)

「ユーレカ・ホテル」(Eureka Hotel 128 番)
「セントラル・ホテル」(Central Hotel 60-61 番)
「フーツ・ホテル」(Foote's Hotel 87 番)
「クローセン・ホテル」(Claussen Hotel 133 番)
「横浜ホテル」(Yokohama Hotel 70 番)
「オテル・ペイル・フレール」(Hotel Peyre Frères 84 番)
「ジャーマン・ホテル」(German Hotel 179 番)
「カリフォルニア・ホテル」(California Hotel 179 番)
「コマーシャル・ホテル」(Commercial Hotel 31 番)
「ヨーロッパ・ホテル」(Europe Hotel 133 番)
「ジャパン・ホテル」(Japan Hotel 40 番)
「オテル・エ・レストラン・デ・コロニー」(Hotel [et Restaurant] des Colonies 52 番)
「チボリ・ガーデンズ・ホテル・アンド・レストラン」(Tivoli Garden's Hotel & Restaurant 山手 68 番)

- 注 78) 拙稿「横浜居留地のホテル史 (1)」(『敬愛大学研究論集』第 50 号。253 - 254 頁)。
- 79) “The China Directory for 1873”, p.S12.
- 80) Durand-Fardel, Laure “De Marseille à Shanghai et Yedo” (1881), pp.339-340.
- 81) 拙稿「フランス郵船ニール号遭難」(『仏蘭西学研究』No.11)。
- 82) “The Japan Weekly Mail”, 1873. 8. 23.
- 83) “The Japan Daily Herald”, 1878. 1. 4.
- 84) ‘L’Echo du Japon’, 1878. 5. 15.
- 85) “The Japan Daily Herald”, 1878. 6. 24.
- 86) Cotteau, Edmond “Un Tourist dans l’Extrême-Orient” (1884), p.44.
- 87) ‘L’Echo du Japon’, 1881. 12. 31.
- 88) 拙稿「幕末・明治初年来日のフランス人建築家」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第 28 号。143 頁)。
- 89) “The Japan Weekly Mail”, 1891. 1. 31.

- 90) Ibid., 1908. 4. 25.
- 91) 'The Japan Gazette', 1874. 6. 30.
 'The Japan Daily Herald', 1874. 7. 2.
- 92) 'The Japan Gazette', 1875. 5. 27.
- 93) 'L'Echo du Japon', 1875. 12. 28.
- 94) Ibid., 1877. 10. 22.
 'The Japan Weekly Mail', 1877. 10. 27.
- 95) 'L'Echo du Japon', 1879. 6. 24.
- 96) 'The Japan Daily Herald', 1875. 1. 29.
- 97) 'The Japan Gazette', 1874. 7. 1.
- 98) 'The Japan Daily Herald', 1877. 4. 14.
- 99) 'The Japan Gazette', 1876. 1. 28.
- 100) 'L'Echo du Japon', 1877. 1. 4.
- 101) 'The Japan Gazette', 1880. 4. 20.
- 102) 'L'Echo du Japon', 1877. 1. 4.
- 103) Ibid., 1875. 5. 25.
- 104) Ibid., 1877. 8. 30.
- 105) 'The Japan Daily Herald', 1878. 6. 29.
- 106) 'The Japan Gazette', 1878. 4. 30.
- 107) 'The Japan Daily Herald', 1878. 7. 31.
- 108) Ibid., 1879. 7. 24.
 'L'Echo du Japon', 1879. 7. 25. Edition de la Malle.
 'The Japan Weekly Mail', 1879. 7. 26.
- 109) 'The Japan Daily Herald', 1881. 3. 15.
- 110) 'The Japan Gazette', 1877. 10. 20.
- 111) 'The Japan Daily Herald', 1878. 6. 29.
- 112) 'L'Echo du Japon', 1879. 6. 16.
- 113) Crow, Arthur H. "Highways and Byeways in Japan" (1883), p.193,
 p.196.
- 114) 'L'Echo du Japon', 1881. 6. 2.
- 115) 'The Japan Daily Herald', 1881. 3. 28.
- 116) Ibid., 1881. 5. 9.
- 117) 'L'Echo du Japon', 1880. 10. 11.
- 118) Ibid., 1881. 4. 23.
- 119) Ibid., 1875. 6. 29.